東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2008 年 2 月 22 日

# ワクフ(寄進)

親愛なるムスリムの皆様。ワクフ（寄進による財団）は、資産もしくは価値のある何かを、アッラーへと近づく目的のみで、一切の見返りを求めることなく、広く人々の役に立つことのために分配することです。この意志によってワクフとそこに属する人々は、行なった見返りのない奉仕によって人々の心に重要な位置を占めてきました。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。私たちの教えは、ワクフに特別の価値を与え、ワクフの設立を推奨しています。クルアーンは、「あなたがたは愛するものを（施しに）使わない限り、信仰を全うし得ないであろう。あなたがたが（施しに）使うどんなものでも、アッラーは必ず御存知である。」（イムラーン家章第９２節）と命じています。預言者ムハンマドも、死によって行為が記録されるノートが閉じられること、ただしこのようなよい行いによってこのノートが開かれているであろうことを吉報として伝えられました。イスラームにおけるワクフの実践のはじまりは、預言者ムハンマドによるものです。マディーナで所有された土地とファダクとハイバルのナツメヤシの果樹園のうちご自身のものをワクフに寄進されたのです。この素晴らしいスンナには、移住者とアンサール（移住者を助けた人々）のほとんど全てが従いました。

親愛なるムスリムの皆様。１４００年のイスラームの歴史において、ワクフは社会生活の様々な分野で重要な役割を果たしてきました。ワクフをとおして貧しい人々、旅行者、孤児、学生、職のない人々への援助が行なわれてきました。結婚するだけの財力がない独身者を結婚させてもきました。ワクフがどれほど重要な機能を果たしたかという点について、現代の世界ではどのようなサービスも無料では受けられないことを考慮しつつ、キャラバンサライの例を通して見ていきましょう。貿易のための大きな道で、３０－４０キロごとに設置されていたキャラバンサライは、豊かな人も貧しい人も、ムスリムもそうでない人も、一切の区別なく全ての旅行者が、自分や乗り物にしている動物たちの必要なものを手にすることができたのです。さらに、病気になった人は回復するまで治療を受けることができました。もし亡くなった場合には埋葬なども行なわれました。

人に対してのみではなく、異なる生物に対しても、ワクフをとおして慈しみが示されました。渡り鳥の巣を作ったり、傷ついたコウノトリの治療を行なったりといったような例をここであげることができます。また社会の一部の教育、健康に関する奉仕もまた、ワクフによって行なわれました。イスラーム文明は、この特質と美質によって「ワクフの文明」となったのです。従ってムスリムは、自分たちの信仰や奉仕という見解においてワクフに寄進したものをどれほど誇りに感じようと、それは不十分なのです。

ワクフという伝統を守り、その発展のために努力する次世代を育てることにつとめましょう。私たちが手にしている全ての美質が信仰から芽生えているのだという真実を忘れないようにしましょう。今日のフトバを、預言者ムハンマドの次のハディースによって締めくくります。「うらやましいと感じる価値のあるただ二つのことがある。一つは、アッラーに財産を与えられ、それを貧者に分け与えることができた人のこと、もう一つは、文化や知性が与えられ、それによって判断したりそれを人々に教えたりする人のことである。」